

近代文学研究叢書

第二十五卷

昭和41年9月20日	初版印刷
昭和45年9月25日	初版出版
昭和45年11月20日	増訂第2版印刷
昭和45年11月25日	増訂第2版出版

[¥ 2500]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(03)五一三一〇八番

近代文学研究叢書

第二十五卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

石 上 太 岡 荻 片 河 木 坂 佐 笹 佐 山 島 玉 辻 内 成 能 濱 人 保 本 村 吉

田 松 間 見 德 勢 瀬 井 田 藤 澤 々 本 原 鱗 桐 田 井 森 田
坂 藤 村 宮 木 由 俣 井 保
澄 定 久 圓 太 賴 正 幸 護 幹 美 實 顯 三 磯 延 吉
八 五 泉

夫 孝 雄 都 吉 郎 賢 勝 濯 鑑 助 二 允 二 明 郎 郎 修 英 智 水 生 郎 吉 男 貞
(国語学) (近代文学) (近代文学) (近代文学) (美 学) (国語学) (近代文学) (仏文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (和歌文学) (俳文学) (近代文学) (比較文学) (英語学) (児童文学) (国文学)

口 繪 写 真

半	眞	渡	島	内
井	下	邊	木	藤
桃	飛	霞	赤	鳴
水	泉	亭	彦	雪

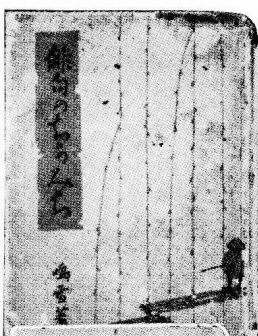
雪 鳴 藤 内

下段右、青山墓地にある鳴雪の墓と句碑

下段左、「秀拔六千句」——大正六年八月刊

鳴雪 肖像

(昭和女子大学蔵)



「俳句のちかみち」——大正五年六月刊

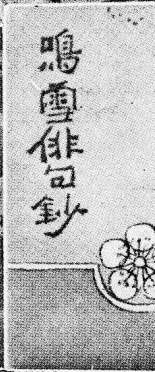
中段右、「鳴雪俳話」——明(昭和四十一年十一月刊)

中段中、「鳴雪俳句集」——大正十五年六月刊

「鳴雪俳句鈔」——大正四年四月刊

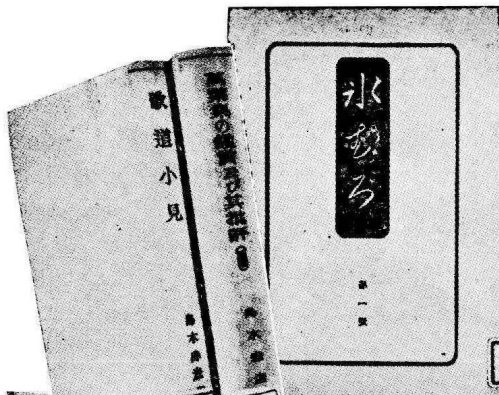
中段左、「老梅居雜著」——明(昭和四十一年五月刊)

(昭和女子大学蔵)

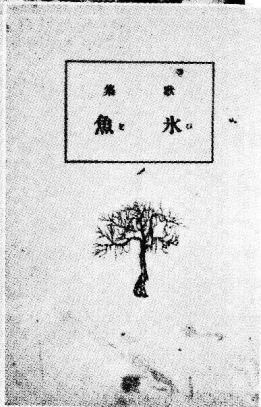


島 木 赤 彦

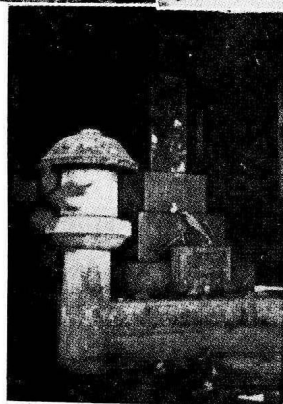
赤彦肖像



万葉集の鑑賞及び其批評
 あり歌道小見の
 一ヶ月中休むは三月は
 成るべく約とあるより
 三月は



下段左、長野県下諏訪町高木にある赤彦の墓
 歌集「水魚」——大正九年六月刊（昭和女子大学蔵）
 長野県富士見公園にある歌碑（斎藤茂吉の筆）



中段中、「水鏡」創刊号（明治三十六年一月）
 上段左、「万葉集の鑑賞及び其批評」（昭和女子大学蔵）
 「歌道小見」——大正十三年五月刊（昭和女子大学蔵）
 中段中、車端修宛の赤彦書簡（昭和女子大学蔵）

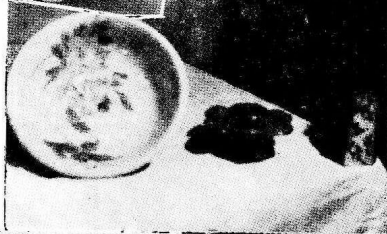
渡邊霞亭

霞亭肖像

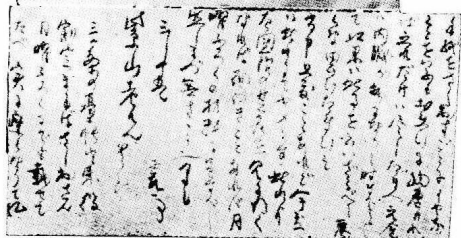
「義民新太郎」—明治二十六年
九月刊（昭和女子大学蔵）



「渦巻」全四冊—大正二年十月—大正三年二月刊（昭和女子大学蔵）
「井伊大老」—大正十五年十月刊（昭和女子大学蔵）



堀紫山宛の書簡
（本間久雄氏蔵）
遺品—絵皿、灰皿、筆立
（菊地文子氏蔵）



大阪府下河内長野市極楽寺内
にある霞亭塚

真下飛泉

飛泉肖像

「戦友」——明治三十九年五月刊

(昭和女子大学蔵)



村長

飛泉作

勤
旋

癸亥

出征

增

「出征」——明治三十八年九月刊
「凱旋」——明治三十八年九月刊
「村長」——明治三十九年七月刊

「村長」——明治三十九年七月刊

(昭和女子大学蔵)

弟儀一郎
宛書翰の一部

學校及家庭
用言文一致
敘事唱歌
第三篇

戰友

飛泉作

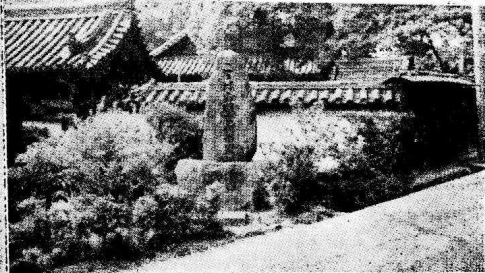
朋友

真下飛泉

こゝは、お國を何百里
離れて、とはき、歐洲の
赤い夕日に、てらされて
友は、野末の石の下

夏照るをいひて
くさむらもなす　俺のふり着
うき　笑ひかへし　三巻五
すず人又わがまは　何かいと
はやあといふ。江ぬみゆか
り歌（うた）をうたふ　ふん日
出ゝ歌をもえん　二巻七話
芳いあらどき。ボケト二三回
五十おはつてゐる。林田氏
礼を土すべし。歎けてありと全
一巻八　三巻九

飛泉抄



「こゝはお国を何百里」の戦友記念碑（京都知恩院良正院前にある）
昭和二年十一月建設

昭和二年十一月建設

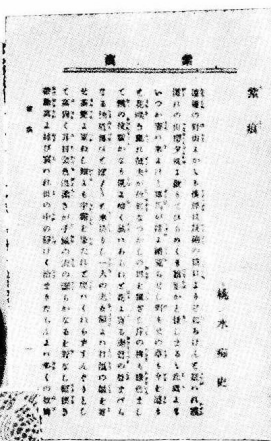
←「飛泉抄」—昭和二年十月刊 (昭和女子大学蔵)

(昭和女子大学蔵)

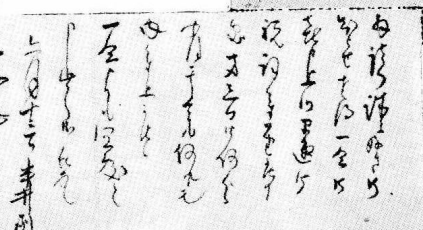
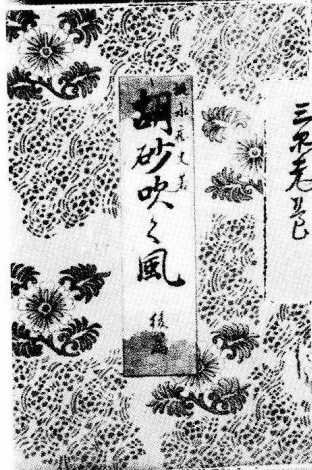
公の心をなすまふ
 人主の心をなす
 公の心をなす
 人主の心をなす
 公の心をなす
 人主の心をなす
 公の心をなす
 人主の心をなす

半井桃水

桃水肖像



雑誌「武蔵野」創刊号
—明治二十五年三月刊
(昭和女子大学蔵)



上段中「武蔵野」第一編に掲載の小説「紫根」(昭和女子大学蔵)
下段左「小説天狗廻状」—明治四十四年六月刊(昭和女子大学蔵)
三品蘭溪にあてた桃水書簡(本間久雄氏蔵)

「胡砂吹く風」後編
—明治二十六年一日
刊
(昭和女子大学蔵)



養生寺(文京区駒込片岡町)にある半井桃水之墓



目次

口	第二十五卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室……(一〇)
凡	例	昭和女子大学編集室……(一五)
内	藤 鳴	近代文学研究室……(二七)
島	木 赤	近代文学研究室……(九七)
渡	邊 霞	近代文学研究室……(二三)
眞	下 飛	近代文学研究室……(三五)
半	井 桃	近代文学研究室……(三三)
近代文芸年表	水	近代文学研究室……(三九)
卷 末 付 記		近代文学研究叢書編集室……(四三)
年 表 補 遺		近代文学研究叢書編集室……(四四)

第二十五卷の成立

本巻には大正十五年二月から同年十一月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

内藤鳴雪は弘化四年（一八四七）四月十五日松山藩士内藤同人^{とまなほ}の長男として江戸三田の松山藩邸に生まれた。十一歳のとき松山に帰り、藩校明教館で漢学を修め、のち明治元年京都の水本保太郎塾に入門、翌二年上京して昌平校に学んだ。明治三年（一八七〇）松山藩権少参事となる。廢藩後、同五年松山の学区取締となり小学校設立に尽力した。八年愛媛県学務課勤務となったが、十三年上京して文部省に出仕、十九年（一八八六）書記官、二十三年（一八九〇）参事官となった。翌二十四年（一八九一）、四十四歳で病いのため退官。以後は、その前年来就任していた松山藩の常盤会寄宿舎の監督として専念、四十年末にいたった。晩年は藩主久松家の諮問員、史談会幹事、愛媛県教育協会の役員等を勤め、郷党後進の育英に尽くした。俳人としては、明治二十五年（一八九二）、数え年四十六歳のとき、当時寄宿舎生であった正岡子規の感化により作句したのが最初で以後句作に精進、句会、吟行、俳談会等にも参加、日本派俳人の長老として重きをなした。その句は平明温雅で古典的格調があり、子規に比してより理知的、また尚古的であった。輪講、評釈等の面では、その豊富な学殖を生かしてとくに大きな功績を遺した。「ホトトギス」をはじめ諸新聞、雑誌の俳句選者として、終始指導的役割を果

たしたことも忘れられない。大正十五年（一九二六）二月二十日、東京麻布笄町に歿した。七十九歳。

島木赤彦は明治九年（一八七六）十二月十七日長野県諏訪郡上諏訪町に生まれた。父の塚原浅茅は、神職、戸長、教育家などを経た。明治二十三年（一八九〇）諏訪高等小学校卒業後、小学校の備教員として勤務のかたわら歌作を始め、二十五年（一八九二）ころから「少年文庫」等に和歌、新体詩などを投稿した。二十七年（一八九四）長野県立師範学校に入学、太田水穂らを知った。三十年（一八九七）四月、下諏訪町高木の久保田政信の養嗣子となり、長女うたと結婚。翌三十一年（一八九八）師範学校を卒業し、長野県下の小学校訓導としての生活を続けながら、歌人としても歩みを進めた。すなわち、正岡子規の選する「日本」歌壇に投稿、入選してから、写実主義的歌風を強め、子規門下の伊藤左千夫、長塚節らに接近、やがて左千夫の指導を受けることとなったが、三十六年（一九〇三）一月「比牟呂」を発売し、同年六月発売の「馬酔木」にもしばしば寄稿して、長野県下での根岸派勢力の中心となった。こうして歌道に専念する決意を固め四十一年（一九〇八）教職を退き、同年十月より発売された「アララギ」に参加、生活上の必要から一旦教職に復帰して四十五年には郡視学として教育改革に尽力したものの、大正三年（一九一四）辞職して上京し、「アララギ」編集に全力を傾注するにいたった。以後、アララギ派の伸長をはかり歌壇の主流たらしめると同時に、みずからも万葉集への傾倒と写生の深化につとめて「鍛錬道」の歌風を樹立した。晩年人生の「寂寥所」に入る歌境への到達を目指し、「太虚集」「柿蔭集」などの名品を生んだ。「歌道小見」「萬葉集の鑑賞及び其批評」の論著には彼の万葉観がうかがわれる。大正十

五年（一九二六）三月二十七日、郷里長野県下諏訪の柿蔭山房で永眠した。五十歳であった。

渡邊霞亭は元治元年（一八六四）十月、尾張国名古屋に尾州藩士渡邊源吾の子として生まれた。渡邊家は代々同藩家老の家柄であったが、明治維新後没落し、家計窮迫の中で霞亭は幼少期を過した。初め医者を目指して名古屋好生館に学んだが、天稟の文才に恵まれて続き物小説を執筆、やがて岐阜、名古屋の諸新聞に入社、専属作者として名声を得た。明治二十年（一八八七）上京、「めざまし新聞」改題の「東京朝日新聞」に入社して同紙に「お巨摩」「三人同胞」などを執筆して文名いよいよ高く、「都の花」にも「浮世」その他を連載、健筆ぶりを示した。二十三年（一八九〇）「大阪朝日」に転じ、同紙のためにつぎつぎと長編をものしたが、他方、二十四、五年には西村天囚、本吉欠伸、岡野半牧らとともに浪華文学会を起し、「なにはがた」を発刊して関西文壇のため気を吐いた。須藤南翠の退社後は「大阪朝日」社会部長となり、時代物、現代物など長編を同紙に連載するかたわら、さまざまな別号を用いて「東京日々」「報知」「国民」等各紙にも執筆、その精力的な活躍は近代随一の多作家の名をほしいままにした。「大阪朝日」に連載された代表作「渦巻」は圧倒的な好評を博し、女性の髪飾りや、履物、菓子類などにまで渦巻模様の流行をもたらした。晩年は主力を歴史小説に注ぎ、正確な史料にもとづいて国民的英雄像を多数説者の前に提示することにつとめた。「豊臣秀吉」「吉田松陰」「坂本竜馬」その他がそれで、これらには彼の脈々たる日本精神讚美の熱情が裏づけられていた。大正十五年（一九二六）四月七日、当時「大阪朝日」連載中の長編「井伊大老」を未完のまま遺して、大阪市天王寺区松ヶ

鼻町で逝いた。享年六十三歳。

真下飛泉は京都府加佐郡河守町に真下石次郎、ステの次男として、明治十一年（一八七八）十月十日誕生。農家に生まれた彼は、幼時糸間屋に奉公し、小学校准教員ともなったが、明治二十八年京都府尋常師範学校に入學するに及んで文學への興味に目ざめ、三十年（一八九七）浪華青年文学会の一員となり、機関誌「よしあし草」に作品を発表した。進んで、與謝野鐵幹の主宰する「明星」に和歌を投稿、鐵幹らに知己を得、また「文庫」誌友のひとりとして詩歌作品をしばしば同誌に寄せ、河井醉茗、伊良子清白、なかんずく相馬御風とは親交があった。三十二年（一八九九）師範学校卒業後は、京都市内の小学校校訓導として兒童の綴方教授などの研究を進め、童謡、童話を創作、読書指導その他実践面にも活躍した。明治三十八年（一九〇五）、日露戦争に際して作詞した唱歌「戦友」一篇は、彼自身も驚くほどの反響を巻き起こし、全国津々浦々にいたるまで愛唱された。が、飛泉は依然教育者として終始し、晩年京都市會議員となり市政に尽力したが、このことも彼の教育界に注いだ熱情の変形したものにはかならなかった。大正十五年（一九二六）十月二十五日、心臓病のため京都府立病院において四十九歳で没した。

半井桃水は万延元年（一八六〇）十二月二日、対馬国厳原に厳原藩の典医半井湛四郎の長男として生まれた。家業の医を嫌った桃水は太閤記、三国志、史記などを愛読、俠骨ある武士たらんと志していたという。少時、

祖父、父らに伴われて渡鮮し、釜山の宗家倭館に成長したが、明治五年父のはからいによって上京、尺振八の共立学舎に英学を学んだ。在学中、同郷の染崎延房を知り、その感化を受けて戯作、続き物小説を執筆、諸新聞に投稿して、後年の新聞小説作家としての素地をかためた。明治十三年下阪して「魁新聞」ついで「大阪朝日新聞」に入社、翌年渡鮮して亀浦事件に遭遇、その顛末を通信して好評を得た。その後二十一年（一八八八）

「東京朝日新聞」記者となり、翌年同紙に「啞聲子」を掲載、以後主として同紙のために長短篇を執筆した。御家騒動物、仇討物その他の時代小説、探偵物、時事物、家庭物その他の現代小説など、その題材は多岐にわたり流麗な才筆は読者を魅了した。なかでも明治二十四年（一八九一）から連載された「胡砂吹く風」は、日清戦争前夜の朝鮮の風雲を描いた伝奇小説で一代代表作と見られる。その後も「天狗廻状」「大石内蔵之助」など注目すべき史実物の作がある。晩年は音曲に親しみ歌沢、長唄等の作詞につとめたが、「サンデー毎日」等諸誌に小説を寄稿、筆力の衰えは見せなかった。

なお、桃水は明治二十四年以来、樋口一葉の師として、自身の主宰する雑誌「武蔵野」に「闇桜」以下の彼女の習作を発表、一葉を文壇に登場させる契機を与えた。桃水の人柄が一葉文学に影を落としていることは見のがせない。

大正十五年（一九二六）十一月二十一日、敦賀で没した。享年六十六歳。（昭和女子大学近代文学研究室）

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名